

平成 26 年度 第 2 回生物多様性推進部会 会議録（要旨）

- 【開催日時】 平成 26 年 10 月 27 日（月） 午後 2 時～午後 4 時
- 【開催場所】 西宮市職員会館 大会議室
- 【出席者】 <事業者> 西宮商工会議所 常務理事 野島 比佐夫 氏
<専門家> 兵庫県立大学 教授 服部 保 氏
神戸女学院大学 教授 遠藤 知二 氏
西宮自然保護協会 会長 三宅 隆三 氏
NPO 法人こども環境活動支援協会 理事 小川 雅由 氏
<事務局> 産業環境局長 他 12 名

【主な内容】

<報告事項>

1. 「広田山公園コバノミツバツツジ保全・再生管理計画」の進捗状況について
2. 「甲山グリーンエリア地域連携保全活動計画」の進捗状況について
3. その他（海浜植物の状況について）

<検討事項>

1. 生物多様性推進部会の位置づけと今後の進め方について
 - ・戦略における施策評価の方向性
 - ・評価に向けた市内保全活動等の情報収集のあり方
2. 平成 30 年度の見直しに向けた自然調査の進め方について
 - ・今後、調査が必要となる重要な生態系の選別について

報告事項

1. 広田山公園コバノミツバツツジ保全・再生管理計画及びコバノミツバツツジの育苗状況について（事務局説明）

《質疑応答》

- ・森林ボランティアは何名参加したのか？（委員）
ボランティアは 9 名参加。全体の参加者は 30 名弱。（事務局）
- ・今育てているコバノミツバツツジの苗は育っているのか？（委員）
前回の部会で見てもらった実生が出ていたものをほぐし、10 本ぐらいに分ける株分けを行い、様子を見ている。挿し木は全部で 4 本発根が確認されたが、挿した数から考えれば現実的な成果ではない。播種を 2 回ほど行い、発芽が見られたことから実生からの苗の増殖というのが本来の筋であると思うので、その方向で進めていこうと思う。（事務局）
- ・一番大きいのは何 cm ぐらいまで育ったのか？（委員）

- 15cm ぐらい。掘りあげたものはもう少し大きく 30cm ぐらい。(事務局)
- ・今後、現場で出てきた実生を取り栽培をした方が効率が良いのか？(委員)
今回の保全活動は、以前に先行して伐採した部分で実施した。今回は、日当たりが改善されたところで実生がある部分が見つかった。その部分は伐採して2、3年経っており、それと合わせたように2、3年経っているようなものが見られたので、田村氏からのコメントにもあるように保全活動で伐採したものの中で実生が生えてきたものについては、それをまた栽培して育てるということはしなくても良いのでは？という所見をいただいている。過密である場合は鉢を持ってきて育てて密度の薄い部分に移植するというのも可能かと思う。(事務局)
 - ・博物館でもコバノミツバツツジを実生から育てているが、効率が悪いことこの上ない。実生苗があればそれを栽培したほうが大量に生産するには良いと思う。どのくらい植えるのかということにはなるが。(委員)
 - ・実施結果については問題無いが、今後のことについて田村氏から実生苗も含めて下草刈りをやりすぎると良くないという指摘がある一方で、もっと日常的に関わり色々な事をしたいという参加者のアンケートがある。マニュアルをどうするのか、関わり方の当初のルール作りが必要である。当分の間はコントロールが必要で、舵取りだけはしっかりしておいた方が良い。(委員)
いろいろな団体など関わってきたが、最初に自由度を与えるとコントロールが利かなくなる。最初のところでルール作りや規範は必要である。(委員)
2月の保全活動後にはコーディネーターに簡単なマニュアルを作成してもらう予定である。(事務局)
 - ・今後の活動予定は？(委員)
今年度は2月に1回。来年度は年3回を予定している。(事務局)
それでは少ないとのアンケート結果があるが？(委員)
まめに神社の保存会の方とも連絡を取り合い、逐次コーディネーターから頂いたコメントを参考に、保存会の活動として進むようにコントロールしていく。(事務局)
 - ・みんなが毎回の会議に参加できるわけではないので、情報が違う方向に伝達されてしまい、独自に判断されかねない。市民が通常は立ち入りができないように、保存・保護しているという掲示と決められた作業日以外は作業できないという設定は必要だと思う。(委員)
 - ・作業内容を忘れてしまう事もあるので1月に1回は活動した方が良いのかもしれない。もしくは、リーダーとなる存在を早く育成する必要がある。(委員)
 - ・クズの根を除去する薬剤を使用とあるが、それはどういうものか？(委員)
パワーポイント資料の写真にある除草剤を使ってみてはどうかとの提案をコーディネーターにいただいた。部会でその使用について検討すると伝えている。(事務局)
 - ・他の生きものへの影響はどうか？(委員)

クズの切り口に差し込むもので他の所に流れないし、土に入れば分解されるので比較的安全なものである。枯らそうとする対象の植物しか枯らさないので問題ない。

(委員)

・もっと活動したいという人がいるのでクズに対する作業は残しておいても良いのかもしれない。クズだと月に1回程度の刈り取りを行っても問題がないので。(委員)

・遠藤先生が心配されているのは昆虫層や池の生物への影響だと思うがどうか。(委員)
作業が少ないとボランティアが言っているので、除草剤を使わず、定期的にクズを伐採する作業を取り入れてはどうかと思った。(委員)

コバノミツバツツジと他の植物との区別は難しいが、クズだけ見分けるのは簡単なので、クズや常緑樹の伐採のように専門の人がいなくても管理できるような作業を確保しておいても良いと思う。(委員)

2. 甲山グリーンエリア地域連携保全活動計画について(事務局説明)

《質疑応答》

・社家郷山キャンプ場のナラ枯れの現況図があるがこれはいつの時点のものか?(委員)
図に落としたのは、今年の7月か8月くらいである。(事務局)

これは今年に侵入したものだということか?(委員)

8月末の段階で県への報告の関係で調査したもの。図にマーキングされているのはナラ枯れの被害にあったもの。社家郷山の方は、枯れたものと枯れていないものも入っているが、今年新たに発見された被害木である。(事務局)

・キャンプサイトの斜面、上の方に登ったところにも何かなかったか?(委員)

昨年は、キャンプサイトのすぐ上の木を伐採した。図の、のところは去年、一昨年に発生して枯れたものは伐採処理しているが、その周辺に入ったものということである。(事務局)

・本数としてはどれくらいか?(委員)

社家郷山の方はここに記載しているものと道沿いで枯れてはいないものが数本。(事務局)

・生きているものが20本くらいあるのか?(委員)

甲山の方では、保存木が20本。潜入性のものも20本くらい。甲山森林公園でも同数くらいある。(事務局)

・甲山森林公園はどこが管理している?(委員)

パークマネジメント甲山である。(事務局)

・川西市の一庫公園でも今年20本くらい被害が出ていた。昨年被害が発生した20本に対しては、ムシムシホイホイを今年5月に20本全体に巻きつけた。先日全て外して

カシナガが何匹付いているのかをチェックすると1万匹ぐらいいた。巻きつけたからといって発生が0になるわけではないが、周辺に拡散させる事は無かったという考えで県に要求しようとなった。ムシムシホイホイの費用は20万円ほどかかったようである。(委員)

昨年、社家郷山で潜入性損木に粘着材を県に塗ってもらったことで、カシナガが飛び立つ分は抑えられたと思う。(事務局)

- ・先日、兵庫県でナラ枯れ対策委員会があった。その時、箕面市では今年500本枯れたとの報告があった。兵庫県として収束していると言っているが、それは枯死している数を見ているだけであり、発生数自体は全然減っていない。川西の南部でも発生している。六甲山では、国交省の六甲砂防事務所により徹底管理されているが、その周辺部では対処できていない。(委員)

西宮市でも社家郷山の全域調査をできている訳ではないし、周辺の六甲山に近い箇所は確認できていないのでは。(委員)

職員が市内全域を高台で見渡せる所から枯れている木がないか、あれば根元まで行き、潜入痕がないかの調査はしている。見落としはあると思うが。国交省の話で、ヘリコプターで空撮している最中に、例えば甲山の頂上で1本枯れているとかといった報告はいただいている。それについて現場を確認したところ、そこにカシナガの潜入痕というものは確認できず、別の原因で枯れたのではとは考えているが、今後発生する可能性はあるかもしれない。(事務局)

- ・六甲砂防事務所の報告がもうすぐ出てくると思うが、コンサルタントに毎木調査をさせているようである。京都から大阪にかけての放置状態を見ていると、六甲砂防事務所のように徹底的に管理すると何とか抑えられるようである。(委員)

大阪周辺とかはそこまで対策をしていないのか?(委員)

全くしていない。高槻では対策をしても無駄というほどに広がっている。(委員)

- ・以前のカシナガホイホイは表向きに貼って付着させるものだった。新しいのは全部内向きにして巻く。スペーサーを入れるのが面倒なので太めのロープを木に最初に巻きつけた後、貼っていくと樹木との間に隙間が空くので簡単に巻くことができる。(委員)
- ・ナラ枯れの原因はいつぐらいから出てくるのか?(委員)

春、5月から7月ぐらいである。冬場に木の中で繁殖したものが飛び出す。今年は、梅雨時期の雨が少なかったために発生数が増えたのではないか。(事務局)

京都でサントリーと調査した結果では7月ぐらいが一番多かった。(委員)

3. その他(海浜植物について)(事務局説明)

《質疑応答》

- ・ハマアザミ、ハマボウともに兵庫県レッドデータブックのAランクであり、自生地も共に1箇所となっておりそこが無くなったら終わりと言う状況である。(委員)

- ・ 植えているのは甲子園浜だけ？上手くいけば広げていく方向性なのか？（委員）
甲子園浜は地元のバックアップが強いので、方向性としては守るべき植物は守り、かつ、希少な植物も育てていこうというもので、海浜植物の見られる浜として意識している状況である。（事務局）
- ・ 海浜植物に限らず、自然性植物の植栽に対して自然保護の原理主義者は植栽などを嫌がる。ハマアザミもハマボウも現実を考えると野生の種が流れ着いて再生するという可能性は0である。原理主義的思考だと絶滅をただ待つだけになってしまう。私の考えとして、待っていても来ないものは、こういう海岸に増殖して植えても全く問題ないと考えて提供させていただいた。（委員）
- ・ 3分の1が生育と言っていたが何株ぐらいあるのか？（委員）
48株頂いたうちの3分の1なので10数株である。（事務局）
- ・ 個体群としてはどのくらいで大丈夫なのか？（委員）
これだけの個体群でも種とかができていると思う。（委員）
- ・ 種はできていたか？（委員）
確認できた。しばらく様子を見ていく。（事務局）
- ・ 西宮浜や香櫨園浜などではやらないのか？（委員）
ハマボウは泥がないといけないので植栽地に制約がある。甲子園浜は適地に植えることができた。ハマアザミならどこでも植えられるのでもし、必要があれば提供できる。（委員）
- ・ 香櫨園浜の西側の端の堀切川の入り口のところにプレートをつけて育てている植物があるがあれは何だったか？（委員）
石積みの中にツルナがあったのは確認している。プレートは自然保護協会となっていたが。（事務局）
中心となってやっていたのは「浜・川・山の自然たんけん隊」である。御前浜では、比較的近くの団体同士で（保全に関し）考え方の違いがある。（委員）

検討事項

1. 生物多様性推進部会の位置づけと今後の進め方について

- ・ 過去に行った市民による生きもの調査を実施していたが、それは今後も継続的にやっていくのか？（委員）
10年に1回は市民全体で生きもの調査は今後も実施していきたい。（事務局）
- ・ その調査で市民から情報の蓄積はできているのか？（委員）
あくまでも市民の方の情報というのは、町ごとの情報なのでもっと細かな情報を調べていきたい。（事務局）
市民自然調査の場合は、正確なデータというよりは市民への意識啓発的な部分が多

いので自然に目を向けていただく機会ととどめておいたほうが無難。今後、このような調査は、専門的な人たちの力を借りなければならないのでそういう位置づけにさせてもらった。(委員)

生物多様性にしのみや戦略の構造から考えると、普及啓発的なことにも意味がある。それは実績として強調しても良いと思う。具体的な資料としては使えなくても市民の方に意識を持ってもらう意味ではすごくプラスだと思う。(委員)

- ・神戸市の例を挙げているが、神戸市と同じように団体名を入れて作っていききたいということか。(委員)

こういうのを作ったらわかりやすいのではないかということである。(事務局)

- ・市がやっているのだけでなく、市民の方々がやっているのをに入れて、協働でやりたいということであるが、それはすごく良いことだと思う。データは集まってきたのか？(委員)

人と自然の博物館が発行している冊子の中に市内で活動している団体がいくつか記載されており、これをベースに問合せを行い、今から動いていこうという状況である。(事務局)

- ・越木岩神社でもそういう会ができそう。マンション計画により越木岩神社がダメになるのではと市民から電話があった。(委員)

越木岩神社の宮司と会う機会があった。夙川短大の跡地にマンションが建つということで、すでにユズリハが何本か枯れているが、どうしたら良いだろうという話であった。(委員)

影響がでるほどの高さなのか(委員)

あるのではないか。県とか市の方にも多少質問はしているということであった。(委員)

それは県の天然記念物？(委員)

県のものである。(委員)

県の社会教育、文化財の方にも、もっと働きかけないといけない。(委員)

市の景観樹林にもなっている。(事務局)

マンション自体は直接影響を与えないが、日照などが影響を与える可能性が十分ある。マンションができた後、日野神社と同じように、日当たりが悪くなるからといって、除草剤で木を枯らすという事態になりかねない。(委員)

- ・保全活動団体には御前浜・香櫨園浜のように、考え方の違う団体があるので、市で情報を集めるとなると線引きが難しい。どちらが良いとかは中々言えないだろう。仮に情報を集めるにしても意見の違いについてはフレキシブルに対応しなければならないが、やっている活動を市が一度紹介することで市のお墨付きをもらったからという事になりかねない。良い悪いは抜きに互いに交流してもらわないと全体として西宮の自然を考えることにはならないので、ゆるやかなネットワークという位

置づけで評価抜きの情報収集ができれば。(委員)

御前浜における活動団体の一方は白砂青松派で海浜には植物のない砂浜だけが理想という考え方で、もう一方は、生物の存在が大事という生物多様性推進派である。どちらの肩を持つのかということになるが、この部会としては生物多様性を推進する会なのでもっと踏み込んで生物多様性推進派についても良いでは。(委員)

元々は、県の尼崎港管理事務所が浜の再生を目的に発足させたもので、その当時は自然保護も目的としてあったのが、途中で考え方が変わったのかもしれない。環境問題をやっていないか?とえばそういう事ではない。環境美化の活動をしている。自然再生というところで価値観が違う。生物多様性の視点だけで、問題であると言ってしまうとカチンときてしまう可能性がある。自然環境の保全と言ってしまうと、そこだけに特化されてしまう。西宮にはそれほどたくさんの団体はない。須磨の方を見ると、美化活動をしている団体も挙がっている気がする。環境問題の中でも、美化や生物多様性、環境学習と切り口をいくつか例示しておき、自分たちの団体はこれを行っている、というのを表示し選択できるようにしてやれば、棲み分けやお互いを尊重できるのではないか。一つに絞ると火花が散ってしまう可能性がある。(委員)

片方の団体は棲み分けようとしているのに、もう一方が棲み分けたくないという考え方の団体もあるので難しい。(委員)

いろいろなところに情報を聞いていくにしても、どのように投げかけるかによって違う。団体なのか、神戸女学院のように大学の授業の一環としてやっている所もある。そういう所にどのように関わってもらうのかも考えなければならない。

(委員)

- ・2042年までという長期的計画を生物多様性の市の戦略に書いてあるのはすごい。明石市のように戦略を作っただけで後のフォローは全くなしでは意味が無い。このように計画を立てて、市民を巻き込むというのは良いことである。(委員)
- ・コープこうべの社家郷山も10年計画で進めている。個別でこのような中長期的な計画をもって活動している所とは上手く連携していかないといけない。今後、このような活動が北部でも出てくるなら、その活動を取り込んで上手く繋げていきたい。市だけでできることは予算的にも限られてくるので他の団体が行っていることを上手く位置づけてやっていければよい。(委員)
- ・市のほうでマスタープランの見直しもある。その時に見直したマスタープランにも沿った形で施策など位置づけられていかなければならない。(委員)
- ・西宮では里山管理をしている団体はあまりないのか?(委員)

「ナシオンの創造の森」ぐらいである。(事務局)

- ・宝塚市のように県からお金をもらえたらよいのに。(委員)

県の事業との整合性があれば良いと思う。甲山の県立公園でそういうのがあれば踏

み込んで良いと思う。(委員)

森林公園と市の施設の関係で言うと連携が上手くいっていない。県の方も甲山森林公園内の管理はするが、山頂や西側の所は指定管理者の業務に入っていないため放置状態になっている。もし仮にグリーンエリアの問題で整備していくときに今の甲山森林公園の指定管理者が管理しているお金の範囲内では山の整備はできない。山全体は計画の中で西宮市に位置づけてもらって対象地として動かせることができればもっと一体的になってくると思う。(委員)

指定管理が切れるのはいつか?(委員)

平成 29 年で終わりである。(委員)

- ・ 山口の方で団体の活動はなかったか?(委員)

船坂で市民協働での農地体験活動があるようだが詳細はわからない。(事務局)

塩瀬と山口と南部と 3 つぐらいで団体があれば良いのだが。(委員)

- ・ 戦略の推進にあたって予算的なところは怎么样了のか? 社家郷山での林野庁の補助金は今年も取れたのか?(委員)

コープこうべが取った。(委員)

西宮市ではその一つしか申請が出ていない。兵庫県で 1 億円を市民団体に分けるという事業があったが、申請があったのは郡部ばかりだった。上手く取り込めたら良いだろう。(委員)

- ・ 各種活動団体をまとめていくという中で、エココミュニティ会議の位置づけはどのようになるのか?(委員)

エココミの中でも、自然環境の保全を活動の一環として位置づけている所があれば入れても良いと思う。山口地区の有馬川のホタルの保全活動などを行っている山口のエココミュニティ会議などは入れても良いと思う。ナシオンについては、エココミュニティ会議に直接的には繋がっていないのでナシオンの創造の森とも関わることができればよい。それ以外では直接、保全活動が団体の活動の一部になっていれば位置づけても良いと思う。(委員)

自然体験程度でやっている所は、春風や平木、甲陽園などもある。自然体験をしている所は入れても良いと思う。学校園でも、山口中学校ではモリアオガエルの保全などに取り組んでいる。各学校の理科部に聞いてみるのも面白いと思う。(事務局)

挙げられるだけ挙げてみるのは良いと思う。(委員)

これから中学校の理科部には情報を色々聞いて回ろうと思っており、掲載するかはともかく幅広く情報は集めようと考えている。(事務局)

西宮市でも「環境学習都市にしのみやパートナーシッププログラム」や「レジ袋削減協定」や「地球温暖化防止推進事業所」など色々な協働の取り組みの仕組みがある。特定の目的でやっているように見えるが、例えば「レジ袋削減の協定」

ではエコカードをやっている事業所にはポイントを与えるだとか、温暖化防止推進事業所でも緑のカーテンや敷地内緑化についても取り組んでいる。そういった仕組みも上手く活かしながら情報収集をしてその情報をどのように活用するかというのは課題になると思う。(事務局)

- ・川西市の生物多様性戦略では事業所ごとの戦略を出させている。そういう所との協働もある。川西市では小学校3年生に環境体験学習を4年生に里山体験学習を組み込み、3年4年の連携した環境体験学習というのをやっている。西宮市でも環境学習を強調するのであれば4年生で里山体験学習を位置づけるのも戦略の一つだと思う。(委員)
- ・尼崎市では、4年生が「尼崎の森中央緑地」に必ず行く事になっている。(委員)
- ・身近な自然を知るというのはすごく重要である。西宮市の中でも体験学習の一貫性のなかでそういうものができるか？5年生は自然学校、6年生は修学旅行がある。そういう形で連携するためにも4年生に里山体験学習を持ってきてても良いと思う。(委員)

2. 平成30年度の見直しに向けた自然調査の進め方について

～今後、調査が必要となる重要な生態系の選別等について

- ・来年度の調査ということで予算化はされているのか？(委員)

専門家に依頼して調査をする予定である。(事務局)

これは再来年も続くのか？(委員)

実施していく予定である。(事務局)

- ・項目として入れてもらいたいのは、六甲山でもそうだが、自然の回復力が高く、樹木がすごく茂っている。大雨が降ったときに樹木自体が破壊の原因となりかねない。防災の視点からの調査を入れていただきたい。六甲山だけではなく、生物多様性だけでなく防災・減災の視点からの調査は絶対必要である。(委員)

六甲砂防事務所に連絡を取り砂防の堰堤の箇所を全部情報としていただく話をしている。何故かと言うと、津波関連施設は浜の防潮壁や水門などに関しては、県から情報もらいプロットして市民に見てもらえるようにホームページで公開しているが、砂防ダムについては情報整理が全くされておらず、歴史も古い。山崩れ防止のための石積みを作った記録などはあるが、その記録が必ずしも100%残っていない。それと同時に六甲山ではその時に植生が圧倒的に増えているので、どんな木をどの時点で植えたかというのが文献を見れば出てくるが、実体論として今どのようになっているかというところがカバーできていないし、途中からの植生の変化もあるので、まず明治の頃には六甲山は非常に危険な山という認識があって砂防工事をやってきたという所は整理をしておかないと、現在ある植生だけの議論は正確でないと思う。社家郷山の調査をやったが100年ぐらいで植生は移り変わるし、40

年経てば今まで何もなかった所がコナラ林になっているなどがあるので、実際に土砂崩れのあった仁川の百合野のような箇所があるとすればきっちり把握しておかないといけない。そういう意味で、六甲の花崗岩剥き出しの斜面などは危険である。

(委員)

- ・生物多様性の県の戦略を一番初めに作ったのは千葉県である。千葉県は生物多様性と温暖化という問題で進めている。兵庫県は生物多様性の中に防災の視点をいれようとしたが入れられなかった。これだけ水害が続くような状況なので、せっかく植物、植生、自然を見る訳であるから減災・防災という視点からの要素を調査に入れておけばこれは大事なことなので途中で切られることなく続けていける。防災・減災の視点を入れて考えていただければ。(委員)

- ・今年度この74箇所を調査していくのか？(委員)

今年度、一部について調査に入っている。今回は北山、鷲林寺の地域で専門家による調査をしており、来年度調査をするにあたって17箇所要調査の地区があるので優先順位をつけてやっていけたらと思っている。(事務局)

防災・減災の視点からゆっくり全市的にやっていけば良いと長期的には思っている。

(委員)

- ・調査項目としては植物だけなのか？昆虫などは入っていないのか？(委員)

今の段階では植物を調査している。(事務局)

- ・74の地点をここで指定しているが、これから仮に全部の調査ができており、その調査が何年前にいつやった？というデータがあって、調査を例えば30年後までに全部一周させていくという考え方に立てば、どんな計画でどこから始めれば良いか、過去の調査が古いものであればそろそろ調査しなければならないとか(調査をする理由が)分かりやすい。スパンとして30年以内にやるとし、一度、調査の基準を作ってみて74箇所を調査できている所、できていない所とその期間を把握しておく、いつ頃には調査をしてはどうか、という想定年表が作れる。そこから優先順位をつけていくと客観性が出てくるのではないかと。何となくここは大事だからと言ってしまおうと誰が決めたのか？他のところはどうか？となるので一度過去の調査でデータがあるものも整理し、いつ調査をやったのか、今後いつ頃に調査できるのかというのが年次でわかれば話を聞くときに判断材料になるのではないかと。(委員)

その際も生物多様性というだけでは弱く、長いこと調査をする必要があるのか？と言われかねないので、やはり防災・減災の視点を入れて来年ぐらいに練り直す必要があると思う。山の斜面や普段、人が入らず水が流れていない谷は大雨の際に一気に流されることがある。(委員)

特に仁川あたりが怖いと思う。仁川の谷筋が深く、木が大きくなっている。この間の夏の台風でも甲山の北側の斜面が崩れて山道が通行止めになっている。相当な土砂が流れている。仁川の広河原でも流された木がたくさんあり、そういう木がまた流され

たときに流木による被害が懸念される。そういう時にどこに砂防ダムがあって土砂が止まるのか止まらないのかを把握するのも必要で防災の視点が重要である。(委員)

六甲山の調査では、崩れているところはマツ枯れが原因となっていた。マツの枯れが原因で、枯れたマツを通じて水が浸透し崩壊するパターンがあった。マツの1本、2本でも誘発材となって流れる事がある。植生調査の際はそういった所も合わせて記録しておくのと防災の面でも役に立つと思う。(委員)

- ・調査の順序のつけ方には客観性が必要。どういうローテーションで行うのか？エリアをどう回していくのか？あるエリアを中心にするのか満遍なくやっていくのかというのは大事である。(委員)

要調査のポイントは北部地域に圧倒的に多いので優先的に進めればどうか？(委員)

社家郷山などの海拔の高い所の調査は終わったのか？(委員)

今ちょうど植生を中心にやっているところである。(事務局)

今年度の調査はこの表のどのポイントをやっているのか？(委員)

32、33、50番のところである。(事務局)

- ・今まで出た意見を基にして考え直していただき、来年度以降は防災・減災の視点を入れながら調査が継続し、西宮市全域の自然が把握できるように考えていけばよい。(委員)

次回の開催日程について

1月末から2月上旬頃を目途に、後日事務局から調整を行う。

以 上